澎湖本島における先史遺跡と遺物※

国　分　直　一

Prehistoric Site and Remains found in Liang-wen-kang, Pescador Island※

By

Naoichi KOKUBU

The prehistoric site is situated on the terrace of upheaved lime stone near the village Liang-wen-kang of Pescador Island, and potsherds are found over an area about 100 meters. There are two spots where the prehistoric relics were discovered in shell heaps. Spot A is situated at the slope near the top of the terrace. A shell heap, about 15 meters in diameter, is exposed to the side of a small road. Spot B is situated at the eastern side of the terrace about 60 m away from the spot A. A shell heap, about 40 meters in diameter, is exposed to the terrace. The red pottery ware, which is decorated with a band of short vertical lines, and the fragmental stone implements of hard sand stone and basalt were unearthed from the shell heaps mentioned above.

1　地理的状況と研究史

澎湖群島は支那大陸と台湾本島との間に位置する要島にして，澎湖本島の外に63箇の属島あり，その中28島は住民を有している。群島中最大なるは澎湖本島，白沙島，漁翁島にして八罩島大嶼島がこれに次いでいる。群島は至るところ概ね坦々たる低い台地をなしている。地表は禿げて樹木なく，一見荒涼たる景観を呈している。島中殆んど山嶽溪流がない。本群島中最高地点は澎湖本島の大武山であるが，それもようやく258尺に過ぎない。

澎湖本島は一名大山嶼と呼ばれ，海岸線の屈曲が著しい。馬公半島と風櫃美半島とが相擁して馬公湾を成し，その北岸に馬公港があり，港内は水深く，且つ広濶にして良港を形成している。

白沙島は一名北海嶼と呼ばれ，澎湖本島の北にあり，東より西に向い，更に折れて鈎形をなす。海浜砂洲に富み，遠く望むと白色に光って見える。漁翁島は一名西嶼とよばれ，澎湖本島の西側にあり南北に延びて東西狭く南するに従い，やや高燥である。澎湖本島，白沙及び漁翁の三島相抱いて澎湖海を擁している。北口は牛公湾の水道にして南口は澎湖島のチムニー角と漁翁島の小頭角とに扼されている。港内濶く，東西1里20町，南北2里半，水深く8～9尋に達する。

※ 水産講習所研究業績　第295号，　1960年1月6日 受理.
Contribution from the Shimonoseki College of Fisheries, No. 295.
Received　Jan. 6, 1960.

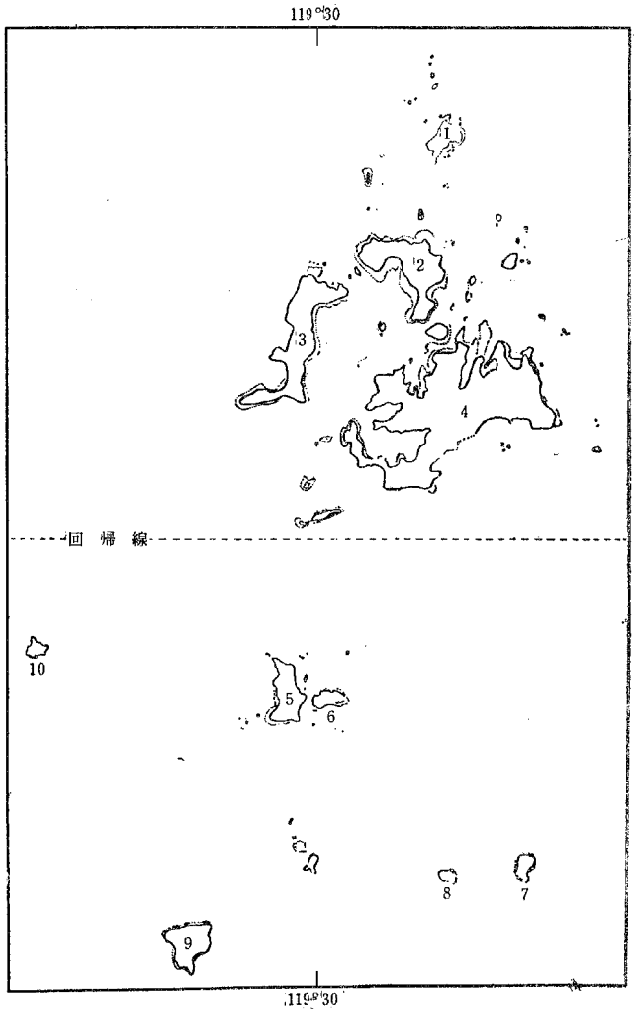


Fig. 1. Sketch map of Pescadores

1 吉見嶼	2 向沙嶼
3 漁翁嶼	4 澎湖嶼
5 八軍嶼	6 将軍澳嶼
7 東吉嶼	8 西吉嶼
9 大　嶼	10 花　嶼

先住民がいたとすればこれら三大島に居住したであろうと思われるが，遺物遺跡が発見されているのは澎湖本島のみである。澎湖本島においてもその東側台地において発見されているのみである。この台地上からは晴天の日台湾本島の中央山脈の連嶺が延々と望見できる。先住民にとっても好適な居住地点であったと思われる澎湖海に面する地帯に，遺跡の発見されていないのは，早く漢民族の居住地帯となり，馬公街の如き人口稠密な市街が発達し，また各種の要塞施設が設営されたためであるかも知れない。しかしながら厳重な要塞地帯として自由な踏査の困難な地域であるから，澎湖本島においてもその他の居住可能な島々においても将来の探査によって新しい発見がありえないとはいえないと思う。

以下澎湖本島における研究史を跡づけておきたい。

澎湖島における先住民について最も早く注目されたのは鳥居龍蔵氏であろう。氏は東洋学芸雑誌（第20巻264号）に元の汪大淵の選著に係る島夷誌略澎湖の項中「男女穿長布衫繫以上布煮塩釀」の一節を引用し

て往時澎湖及び附近の島嶼に蕃族の居住した証左とされた。その後明治40年小西成章氏が初めて同島青螺郷で打製石斧を発見された。

この資料については伊能嘉矩氏が「澎湖に於ける石器の発見」東京人類学雑誌259号（23巻）として報告されている。

石器は澎湖本島の北端南寮灣青螺郷の虎頭山の西北麓海岸における阿炭層中より発見されたものと報告されている。以下は伊能氏報告より引用である。

石器の包含せられてあるところは概して炭化未だ進まず，褐色なる外観の下に木状を其儘に維持しつゝありて，中には判かる木理の見える年輪すらも算せらるるものがあるので，植物学者の鑒定ではその多数は現在台湾本島の中部以南の一帯において海抜一千尺以下の地に繁茂する茄苳（Bischeffia Javanica BI.）に類する樹木の変成であろうと。

石器は全く新に手をつけし発掘層中より発見したので，他方より混入したと認むべき形跡のないのは疑ひなく，而かも現在同島の地表を形成する玄武岩の曝化によりて生ぜる赭褐色の分解土の中に嘗て石器を見出したという例はないということである。

同上石器については，なお，尾崎秀真氏が「澎湖の蕃族」（上）（理蕃の友第1年，6月号昭和7年6月発行）においてふれている。

「勿論その石器は自分が実見したのではないが，今から20年程前麻剌里亜調査の為めに同島に出張した羽鳥博士から聞いたことで博士の談によるとその石器は台湾本島で屢々実見する打製石斧であったということである」と。

なお，大正3年3月には山田金治氏が，澎湖島において打製石斧を発見されたことを台湾博物学会会報第11年第55号（大正10年12月刊）において発表されている。

しかるに，大正三年三月余は澎湖島出張の節良文港二ヶ所に於いて合計三筒の打製石斧を発見せり。是等石斧の何れも同島の玄武岩を用いしものにして其形大なり。遺物は集団的散布地をなせるに非ず何れも路傍に於いて石礫中に混じ居たり。右の発見により現時無木荒涼たる洋中の孤島にも古く石器使用の種族ありしことは疑いなき処にして従来同島に於いて発見せられたる石器が如何なる種族によりて遺されしものなりや現時台湾本島の山地に占居する蕃族の遺物なるや，或いは南清南海島に住する苗，畲，黎の Aborigines と関係あるものなるや頗る興味ある問題なり」と，

なお，氏は同上発見の石器は台湾博物館に出陳してあるを以て就いて見られたしと附記している。（山田金治，恒春半島及澎湖島にて発見せる石器時代の遺物）

現在台湾省立台北博物館（日本時代の台湾総督府博物館をうけついだもの）には2個の澎湖島出土標品が陳列されている。そのうち一例は良文港出土とあり，他の一例は澎湖島とのみ記載されていて，出土地名が詳細でない。発見者名も記録されてないが，おそらく上述の山田氏の発見にかかるものであろう。山田氏記載によると発見は3個とあるから，1個は紛失したものと思われる。しかしながら澎湖島発見標品の極めて稀少なる今日この2例の標品も又極めて貴重な標品といわざるを得ない。従来図示されたことが一度もないので図によってこれを示しておきたい。（第3図1，4）いずれも石質は同島の基盤をなす橄欖石玄武岩を用いしもので，いずれも風化をうけている。風化の状況を見るに橄欖石の部分は風化に抵抗して残っているので，ぽつぽつと黒く浮き出して見える。その状況は台湾西海岸西南部地方において発見される玄武岩石器の風化の状況に酷似していて，両者の使用時代の上に密接な関連のあることを示すもののように思われる。

その後筆者は，昭和15年7月虎頭山の西方良文港において繩席紋土器を包含せる遺跡を発見した。この遺跡については「澎湖島良文港における先史遺跡について」という報文を南方民族第6巻第4号に掲げた。当時筆者は，将来の調査に期待していたので，同報文は覚え書風のものとして遺物の図示に際しては土器も一部を示したに過ぎなかったが，その後戦争の進展は再調査の機会を恵まなかった。終戦後中華民国台湾省政府によって澎湖島調査が企図された際調査員の唯一の日本人として調査隊に参加して高雄桃仔園の海軍軍

港より出発したが，風浪高く中途よりひきかえしてしまい，遂に再調査の機会を失くしてしまった。従って次に「南方民族」に掲げた報文によりつつ記載を略していた土器片の図示，台湾本島の先史遺跡との関係についての新な知見を加え，当時掲載不能なりし地図を附して現在可能な限りの記載をしておきたい。

2　澎湖島良文港に於ける先史遺跡

筆者は昭和15年7月虎頭山の西方良文港において化石層であろうと思われる広大なる貝の堆積層中に遺物包含層を発見した。遺物包含地を中心とする貝層中には明らかに食用に供されたと見てよいと思われる貝殻も包含されていた。即ち貝塚と見られる場所は2ヵ所見出されている。

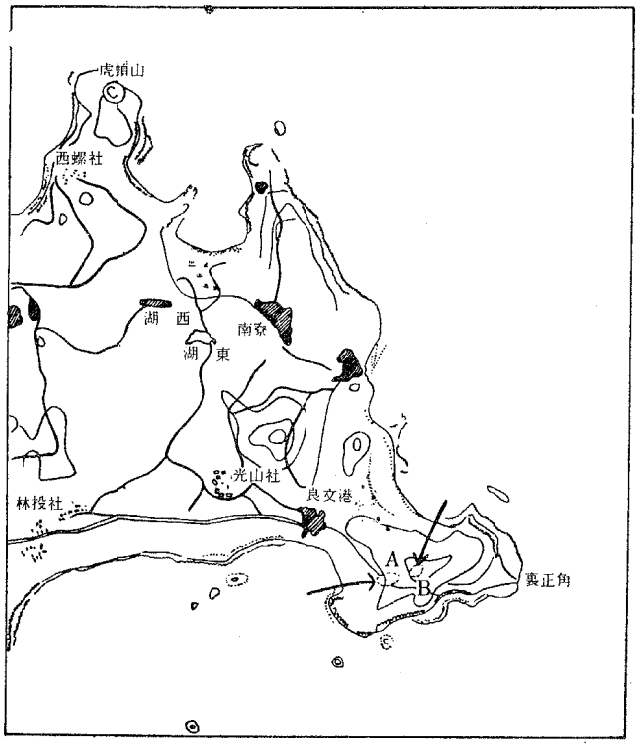


Fig. 2. Showing the spots of shell heaps at Liang-wen-kang.
Pay heed to the spots indicated by the arrow marks.

発見の由来　遺跡の位置

既に述べたように伊能嘉矩氏の論文に，澎湖島における石器発見の記載があることよりして，調査の機会を待っていたものであるが，偶々昭和15年7月良文港警官駐在所に民俗調査のために立ち寄った際，同地の漁民にして当時68才の老翁洪文通氏が黒みがかったやわらかい土器片の出る所があるが，それは太古の人間が使用したものであろうと伝承されていると語ったため，時の澎湖庁警務課長竹村氏，台南一高女教諭翁長林正氏及び警官駐在所所員とともに伝説の土地に赴くや，広大なる貝（岩礁性の貝にして二枚貝は少い）の堆積散布せる中に土器を包含する地点が2箇所発見された。

位置は良文港駐在派出所より東へ約500 m，同部落共同墓地に接続する海を望む台地頂辺の傾斜面上に露出していた。

遺物を包含せる地点は約60 m の間隔をおいてほぼ東西に2箇所あり，東方の貝層は約15 m の径をもつ

範囲内において土器を包含し，西方の貝層は約 40 m の径をもつ範囲内において土器を包含している。然し包含層の厚さは何れも小にして最も厚き部分にしても 60 cm 乃至 40 cm に及ぶに過ぎない。以下前者をA地点，後者をB地点として記述する。

（1）遺物包含層中に見られる貝類

遺物包含層中に見られる貝類は，大体において遺跡をとりまく広範囲の貝層中にも見出されるが故に遺物包含層中に見られる貝層を人為的な貝塚であると推定することは危険であるが，食用に供したと思われる痕跡（肉をとり出すために貝殻を打割った痕跡）を止めるものが遺物包含層中には容易に発見されるので，貝層のすべてを化石層と見ることはできない。

遺物包含層中に見られる貝の種類は，筆者の採集せる標品について台北大学地質学教室に金子寿衛氏に同定していただいたところによると次の如くである。

良文港遺跡地包含貝類（27 種）×記号は包含地点を示す。

	Pelecypoda（斧足類）	和　　名	A地点	B地点
1	Barbatia fusca (Solander)	ベニエガイ	×	
2	Peteria sp.			×
3	Lima Sowerbyi Deshayes	ミノガイ		×
4	Cirre scripta tumefacta (Sowerby)	タイワンシラオガイ	×	×
5	Meretrix petechialis (Lamarck)	シナハマグリ	×	
6	Tapes platyptycha Pilsbry	スリガハマ	×	
7	Caecella chinensis Deshayes	クチバガイ	×	
	Gastropoda（腹足類）			
8	Patelloida concinna?(Lischke)	カフダカアヲガイ？		×
9	Cellana sp.		×	
10	Haliotis iaponica Reeye	トコブシ	×	
11	Tectus pyramis (Born)	ギンタカハマ		×
12	Mondanta labio (Linné)	イシダタミ	×	×
13	Tegula (Chlorostoma) xanthostigma (A. Adams)	クマノコガイ ※	×	×
14	Tegla (Omphalius) niggrrima (Gmelin)	ヒメクボガイ ※		×
15	Turbo (Marmarastoma) stenogyrus Fischer	コシイカサザエ	×	×
16	Lunella coronata granuta (Gmelin)	カンギク	×	×
17	Nerita (Theliostyla albicilla) albicilla Linné	アマオブネ		×
18	Neritastriata Burrow	コシタカアマガイ	×	
19	Batillaria bornii (Sowerby)	クワノウミニナ	×	×
20	Storombus (Conmurex) luhu anus Linné	マガキガイ	×	×
21	Strombus (Strombus) issabella Lammarck	スイショウガイ		×
22	Erosaria (Ornamentaria) annulus (Linné)	ハナマルユキ		×
23	Monetaria (Ornamentaria) trapezium (Linné)	ハナビラダカラ		×
24	Fassialaria (Pleurploca) trapezium (Linné)	イトマキボラ		×
25	Catharus (Pollia) fumosus (Dillwyn)	ホラダマシ	×	
26	Conus sp.		×	
27	Bradybaena (Acusta) toyenmougaiensis (Bolle)	タイワンウスカワマイマイ	×	

（2）遺　　物

澎湖島は海軍要港として自由な調査の不可能な土地であるが，日支事変以後軍事上の理由からいよいよ調

査困難な状況にあった。発掘は地形の変更を来たすとの理由により許可されなかった。従って警察官の立合いのもとに表面採集を行った上道路の開鑿によって生じた包含層の露出断面を整理することにより新鮮な断面を切開露呈せしめる他にボーリングを行い，遺物包含の分布と厚さを計るという作業を辛うじて行うことができただけである。遺物の量の少いのは包含層の一部に新鮮な面を出すための切開を行った際に得たもので，本格的な発掘が行われていないためである。

（a）石　器

完全なる石器は発見するに至らなかったが，玄武岩石器の断片と硬質の砂岩石器の断片を貝層中からえた。

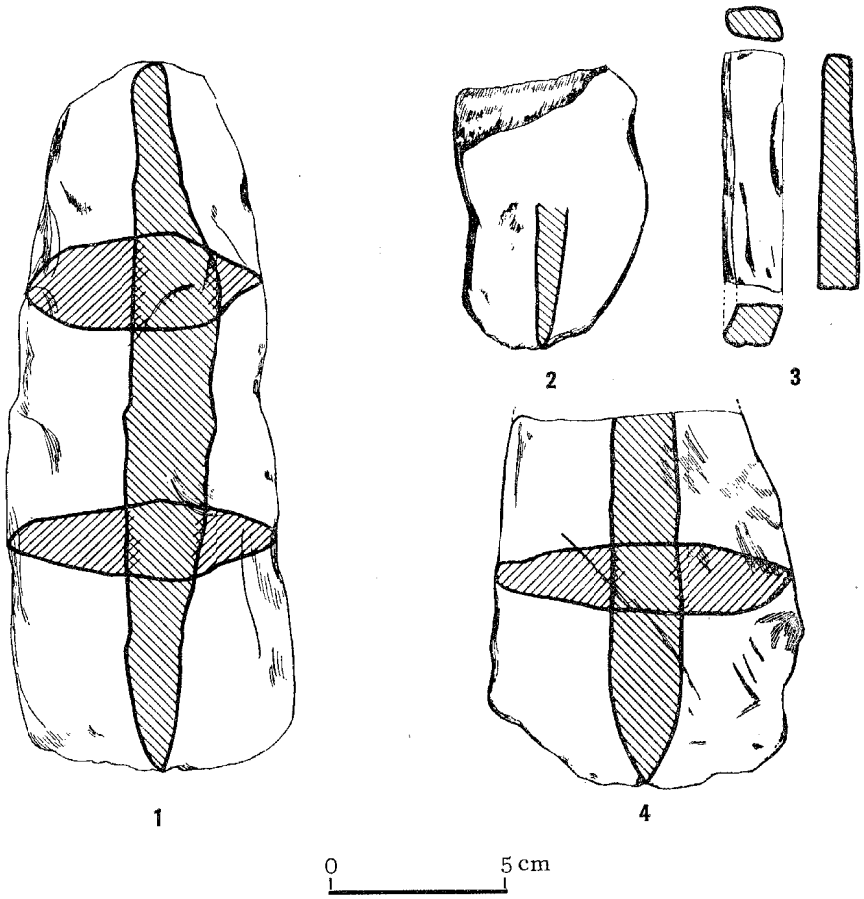


Fig. 3. Stone implements.

前者は器面全面に敲打を加えて調整し，ほぼ斧形を造形したものであるが，左右シムメトリーでない（第3図—2）。後者は細長の角柱状石器であるが，断片にして石器の性質は不明である（第3図—3）。前者は澎湖島の基盤をなす玄武岩を採集したものと考えられるが，後者は霏爛をへない硬質の緻密な砂岩なるより見て台湾本島より見たものと思われる。本島においては玄武岩層の間に砂岩の薄層をはさむ部分があるが，霏爛著しいものがある。石器の中には以上の他に玄武岩礫に人工的な凹みを有する凹石が一例出土している。

（b）土　器

包含せる土器は狭い口縁を有する繩席紋土器を主体としているが，稀には無紋の土器も包含されている。色はいずれも玄武岩の曝化によって生じる赭褐色の分解土に近い色を示している。土器は殆んど薄手にして，僅かに外反する口唇を有し，口縁部においてやや厚く，腹部において最も薄くなっている。

土器はいずれも極めて片々たるものに破砕されているために，土器の全体的形態を復原的に図示すること

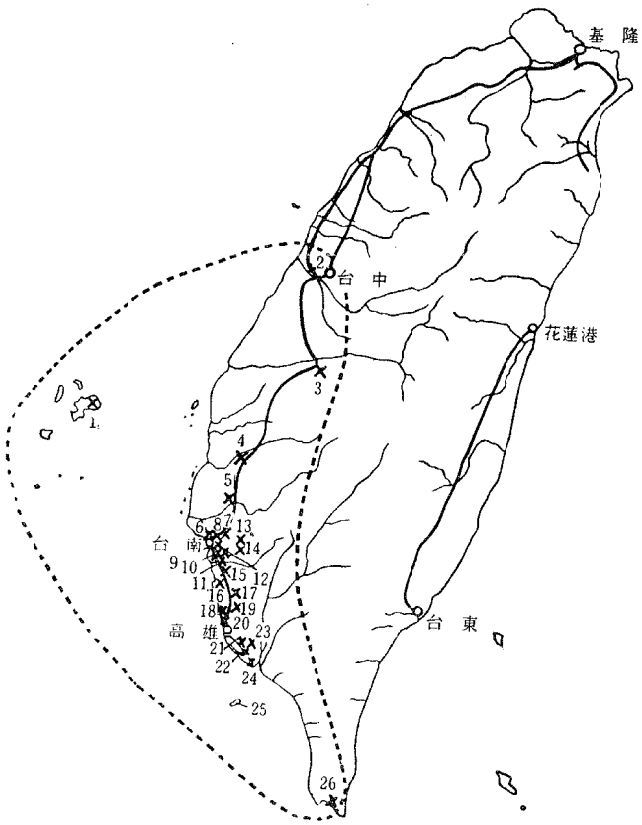
はできなかったが，口縁部の残存断片を通して推定的な口縁部の形態を描くことは可能である。採集した20片の口縁部断片中，甚だしき断片を除き復元図を描いたもの15片について見るに推定口径は6.6 cm から13.4 cm に至るものが見られた。なお土器の土質を見るに，台地を被覆する赤土，即ち玄武岩の曝化によって生ぜる赭褐色の分解土を使用せるものの如くであるが，更に珊瑚石灰岩の風化崩壊せる如く思われる白き砂粒を包含している。繩蓆紋を施すための繩は細く，中には極めて細き捩糸を用いたものと考えられるものもある。施紋の方法はおそらく平板式の叩き具に捩糸を緻密に平行にまきつけた施紋具をもって叩きつけたものと考えられる。なお，注目すべきは繩蓆紋土器の口縁部に装飾を施すことは良文港においては稀なことではなく普通のことであったと思われるほど，各断片に装飾の跡を残しているが，多くは薄れて消え去らんとしている。その状況から見て塗彩は焼成後になされたものと思われる。彩紋は口縁上面に平行帯状に施されている。顔料は黒褐色のものと赤褐及び淡紅のものとがある。採集せる20片の口縁部断片中，顔彩を有するもの11片，そのうち黒褐の塗料を用いしもの4片，赤褐もしくは淡紅の塗料を用いしもの7片である。

良文港における彩陶の発見は台湾における彩陶の最初の発見であった。

採集せる土器片中には底部と思われるものが2片えられている。一例は高台の断片と思われ，一例は極めて微少な揚げ底を示しているが，大体において平底といってよい形式のものである。

3　良文港遺跡と台湾本島西部海岸地方遺跡との関係

澎湖島は台湾本島と近い位置にあるため，先史時代において両地間に交渉があったと考えられる。そのことを示す若干の証跡がある。



1. 良文港
2. 頂街
3. 上茄苳
4. 国母山
5. 蔦松
6. 六甲頂
7. 永康
8. 三本木高地
9. 台南第二中学校
10. 十三甲
11. 二層行溪々岸
12. 牛稠子
13. 五甲
14. 湖子内
15. 大湖
16. 湖内
17. 小崗山
18. 桃仔園
19. 覆鼎金
20. 内惟
21. 仏港
22. 二橋
23. 天岩洞
24. 鳳鼻頭
25. 大寮
26. 墾丁

Fig. 4. Distribution range of stone implements in olivine-basalt.

台湾本島においても繩蓆紋土器を出す遺跡は西海岸においても多数発見されているが，それらの遺跡の繩蓆紋土器は水平磨研の口縁を有する点において，また器壁の厚さにおいていずれも類似している。施紋された繩蓆紋は捩糸を用いたもので，その施紋の方法も共通している。即ち叩き紋である。それらの遺跡においては石器の材料にしばしば玄武岩が使用されている。玄武岩は繩蓆紋土器を主体としていない他の遺跡，黒陶或いは紅陶遺跡においてもしばしば採用されている。澎湖島の海岸においておびただしく見出される礫状の原石がそのままの状況で遺物包含地に発見された場合もある。（台南市台南第二中学校々庭遺跡）台南台地において発見される玄武岩石器の石質が極めて澎湖島の基盤をなす玄武岩の石質に類似することは，既に早く早坂一郎教授らが指摘されたところである。

筆者はその後，高雄桃仔園出土の玄武岩石器，台南台地の牛稠子遺跡出土の玄武岩石器と良文港の遺物包含層中より出土せる凹石とを顕微鏡下に検出することを金子寿衛男氏を通じて台北大学地質学教室に依頼せしところ，いずれも橄欖石を含む玄武岩にして同種のものであることが明瞭とせられた。以上の検出は早坂一郎教授の査閲を得たものであることを附記しておかなければならない。

このことは澎湖島において得難い硬質の緻密な砂岩が良文港において石器材に使用されていることと，相まって，良文港地方と台湾本島西海岸地方との間に先史時代の交通の存在したことを証するものといえるであろう。

台湾南部において橄欖石玄武岩を用いた石器の発見は大肚溪の北，大肚丘陵の西縁に位置する大肚郷頂街の遺跡に見られ，南は恒春半島の墾丁遺跡に及んでいる。島嶼としては小琉球島にも発見される。しかして使用量の上からいうなら大体において曽文溪の北岸番子田国母山遺跡から以南，殊に台南地方から高雄地方の海岸地帯遺跡において著しいといえる。これら玄武岩石器の分布からいって澎湖島と台湾本島西海岸南部地方との交渉が相当頻繁に行われたことが推察され，その交渉或は影響圏は南は墾丁小琉球島を含む極南地方から，北は西海岸のほぼ中部大肚溪北岸地方に及んでいるのである。澎湖諸島は36島が数えられているが，本島に次ぐ大島には白沙島，漁翁島，望安等がある。それらの島々の状況は未だ調査されていないので，将来の調査によって新事実が発見される可能性がある。尾崎秀真氏は白沙島に赤嵌なる地名のあることに注意し安平附近の平埔族が白沙島に分布していたろうと思われるといっておられいることは興味ふかく思われる。

早く宋代の文献通考に「琉球国在泉州之東有島曰澎湖烟火相望」と見えていることによってもわかる如く，この島は大陸にも近接しているので，良文港の遺跡は南支那沼岸地方との連絡交渉を考える上にも注意すべき遺跡であると思われる。

追記。筆者が1948年8月台湾を去ってから後，台湾大学の地質学教室の林朝啓教授によって澎湖島において多数の貝塚が発見されたと，台湾大学考古人類学教室の宋文薫講師が知らせて下さった。それらの中には宋代の青磁を含むものもあるというが，詳細は不明である。

PLATE

PLATE I

Views of shell heaps 1—Spot A 2—Spot B.

1

2

PLATE II

Painted pottery

PLATE II

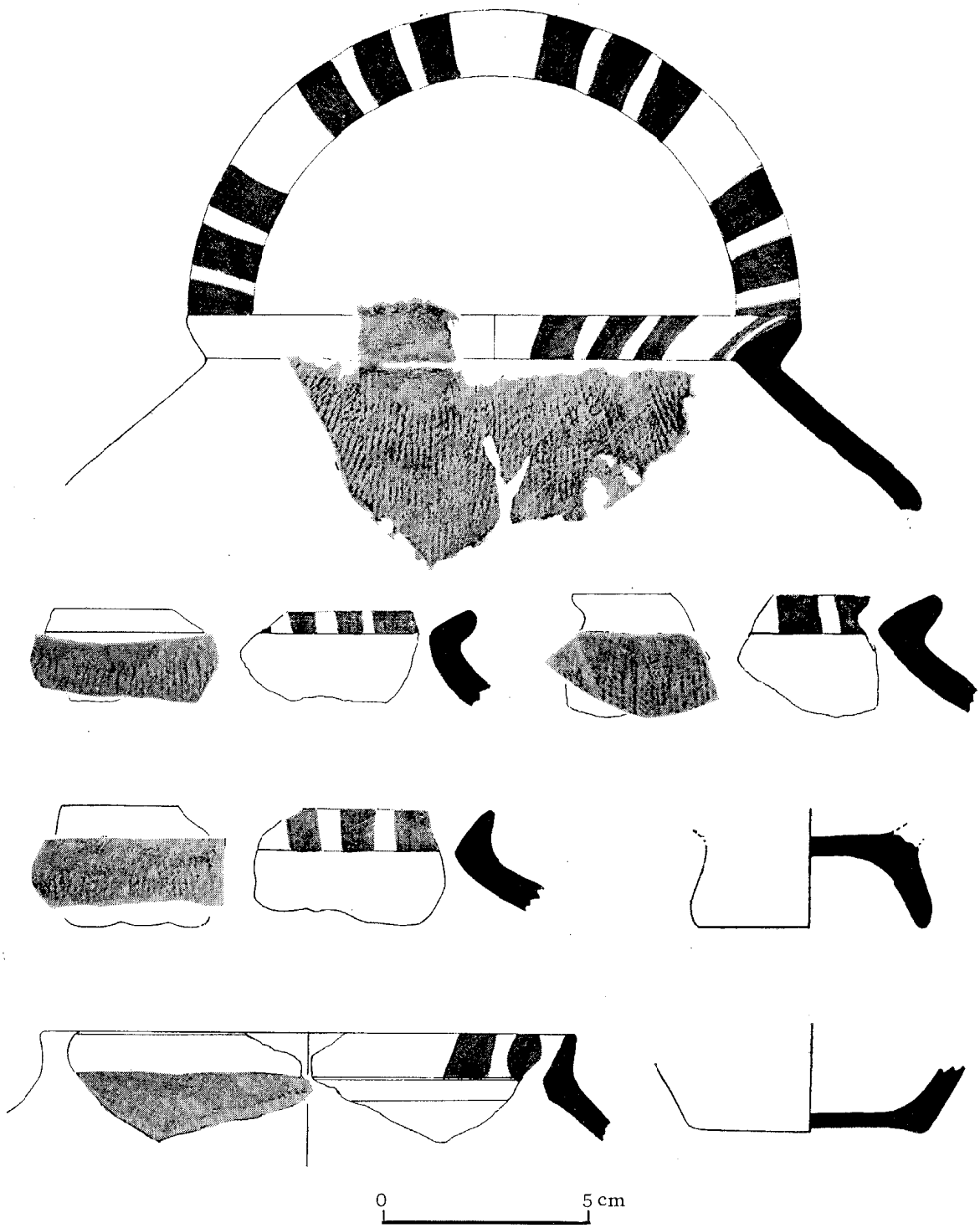
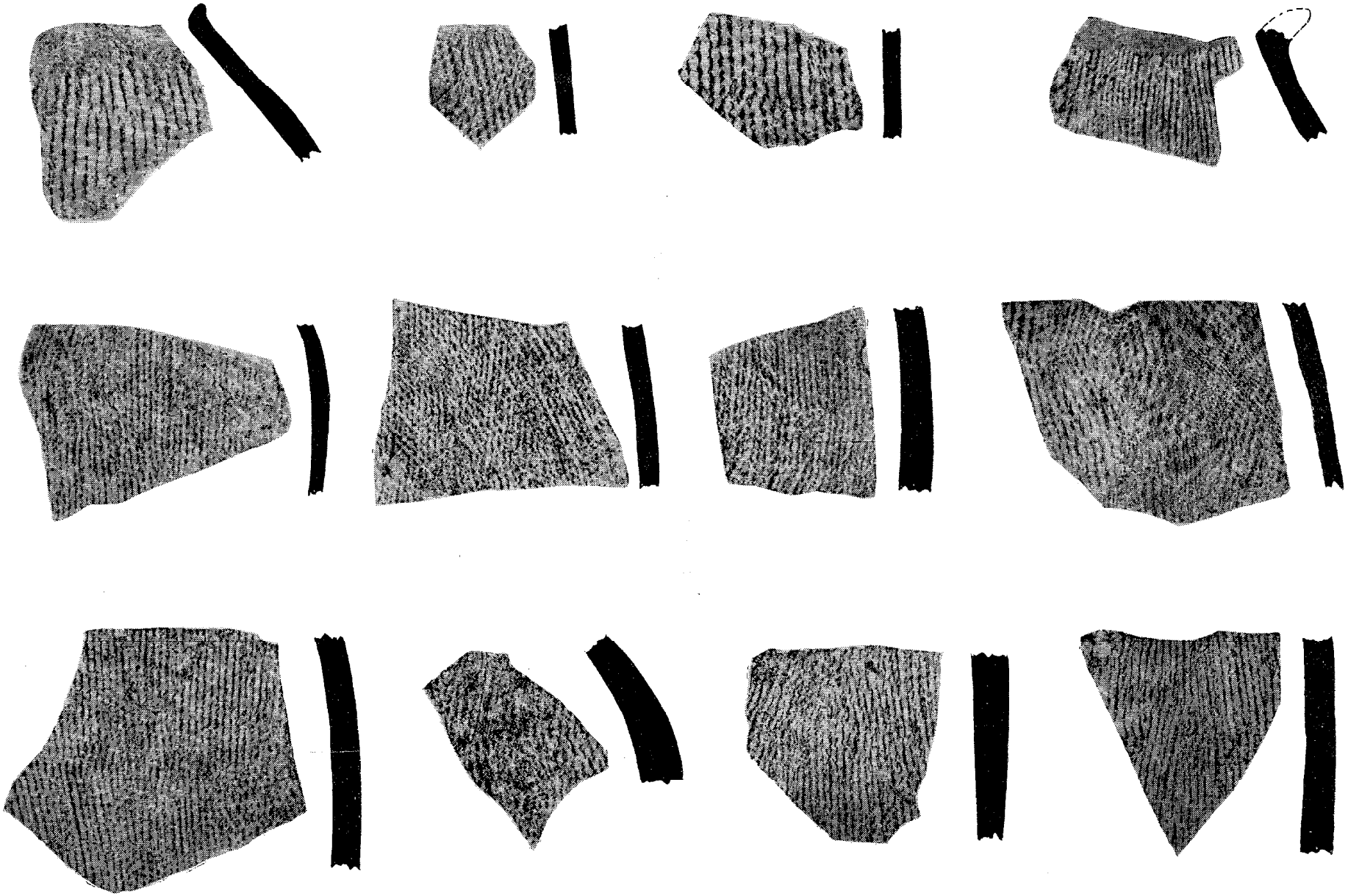


PLATE III

Potshards with the cord impreslion